幼児の教育　第94巻　第５号　平成７年５月１日（毎月１回１日発行）昭和23年４月15日第三種郵便物認可　ISSN0289-0836

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1995
5

お茶の水女子大学
平成
7.3.31
附属図書館

第94巻　第５号　日本幼稚園協会

保育者研修シリーズ

●園内研修資料として最適
●保育の見直しに役立つ

新しい保育の考え方による保育技術の実践書で、中堅保育者としてこれだけは身につけておきたい保育方法が分かり、保育全体が見通せるようになる。中堅保育者の保育の見直しにも好適。
日常、保育現場で起こる疑問や迷いを、子ども理解、子どもの生活と計画、援助、環境など四種類に分け、それぞれに実践例をつけて問題点に答えたもの。子どもと保育の基本がよく分かる。

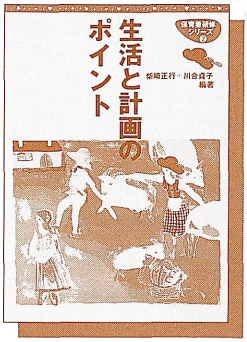
① 子ども理解のポイント

保育は子どもをよく知ることから始まる。子どもの生活の理解、育ち合いの理解、発達の理解、関係の理解などに視点を当てベテラン保育者が実践事例をそえて子ども理解のポイントを示したもの。

柴崎正行＋今井和子　編著

B５判・128頁・定価 2,000円（本体 1,942円）

② 生活と計画のポイント

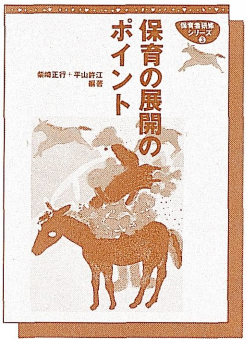


保育計画の作成、計画と実践の見直しをはじめ、教育過程の編成までを書きやすい記録づくり、使いやすい計画づくりに焦点をあてて生活に合わせた計画作りを解説したもの。子ども中心の保育への見直しに役立つ本。

柴崎正行＋川合貞子　編著

B５判・136頁・定価 2,000円（本体 1,942円）

③ 保育の展開のポイント

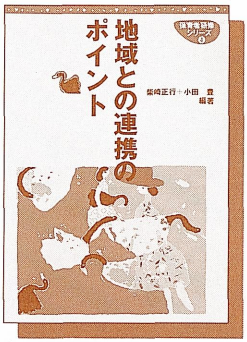


保育実践でむずかしいとされている援助の仕方やタイミングについて解説したもので、子どもの気づきや工夫、発想を生かした展開を中心に園生活の流れにそった展開方法をまとめたもの。子どもをいきいきと生活させる保育の見直しに役立つ。

柴崎正行＋平山許江　編著

B５判・168頁・定価 2,000円（本体 1,942円）

④ 地域との連携のポイント



子どもの成長は環境の生かし方によって大きく左右される。保護者との信頼関係、保護者の要望と悩み、地域との信頼関係、地域の行事、環境、人材の生かし方、保育者間の連携など、地域に開かれた園づくりのポイントが分かる本。

柴崎正行＋小田　豊　編著

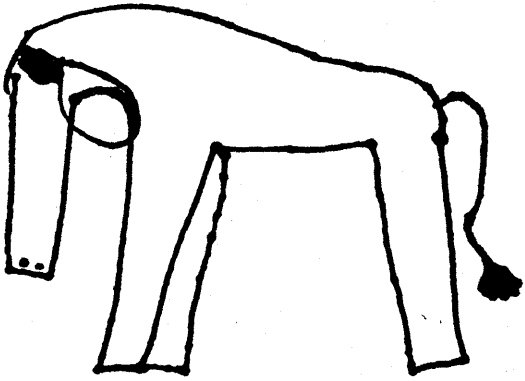
B５判・146頁・定価 2,000円（本体 1,942円）

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第94巻　第５号



幼児の教育

目次

——第九十四巻　第五号——

子供讃歌……（4）

〈巻頭言〉保育における根本考察と現実化（如是我聞）……河邉　杲…（6）

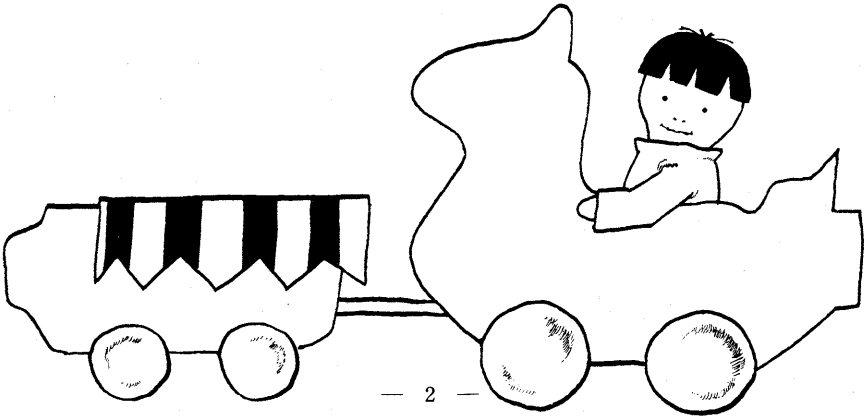
人間を尊敬することが文化の基礎である……津守　真…（8）

動物行動の研究から(1)
動物たちとの対話……柴坂　寿子…（13）

子どもたちとの生活のなかで……大木千佳子…（21）

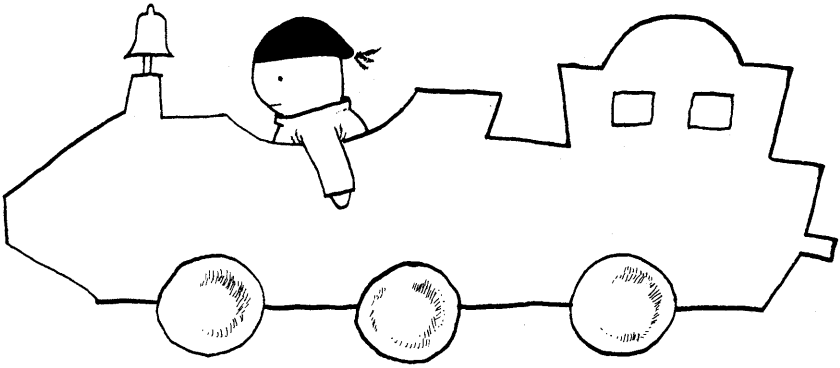
にわとり小屋でのひととき……椎名　裕子…（26）

© 1995
日本幼稚園協会



お母さんのサンタ大作戦……宮里　和則…（32）
保育実践のパイオニア――氏原銀(1)……守隨　香…（40）
「言葉」が幼児理解の壁になるとき……入江　礼子…（46）
ある日の育児日記から（53）……佐藤　和代…（55）
私の子ども時代(7)
よく遊び、よく学び……鈴木　孝…（56）

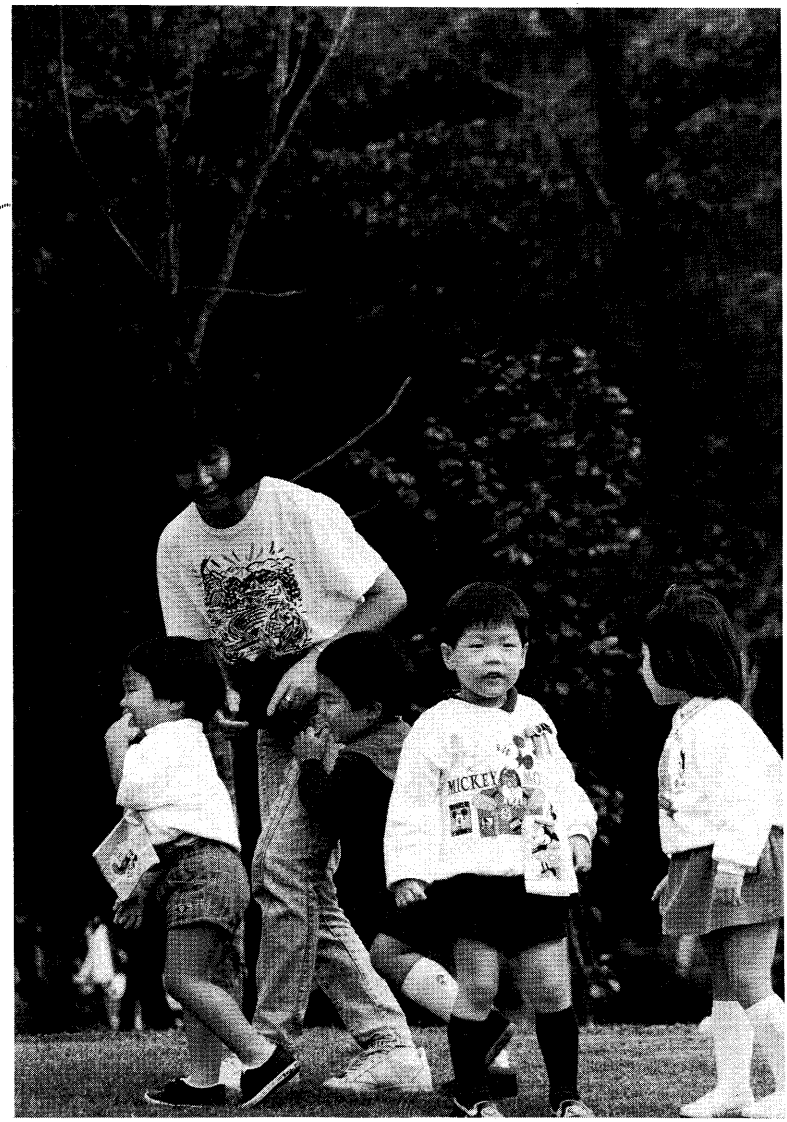
表紙・松永　潤二／扉題字・津守　真
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット・彌永たたえ
編集委員・田代　和美／本田　和子
桝田　正子・伊集院理子
編集部・大沢　啓子



子供讃歌

幼稚園を出て、広い公園へ

撮影・平野　清


MICKEY

〈巻頭言〉

保育における根本考察と現実化（如是我聞）

河邉　杲

普遍性や論理性の追及という近代科学思想が、その発展過程で、人類の幸福と利益をもたらした反面、地球規模の公害等数多くの負（マイナス）の課題を残したまま、あと五年で二一世紀を迎えねばならない。学校教育、なかんずく保育においても、その渦中にある事実を見逃すことはできない。例えば深刻化しつつある登園（校）拒否・暴力・いじめ等々の課題は、このことを物語っていて看過できない。

私はここにこのことに関連して二つの問題についての根本考察とその現実化が緊急に必要だと思う。その一つは、保育活動において、その対象としている幼児とその成長発達を助長する役割をもつ保育者とが、相互にそれぞれが50％・50％の責任を持っているかどうかという問題である。保育を「教える」こと、「導く」こととらえれば、保育者は100％の責任を背負うことになる。ひとりひとりの幼児が成長力を持ち、同時に異質であることを認めれば、その保育環境も、活動の場も、両者の関係も、少なくとも公式化し得るものではない。ひとりひとりが成長しようとする力を十分に発揮し得るように（両者がそれぞれに50％の責任を果たすことになる）援助していくことにより、はじめて保育は成立する。幼

児（人間）に成長力があり、これを尊重して保育をすることは論理的にはよく理解されてはいるが、実際となると観念的、概念的なものとしてすり変わってしまっている事実が問題だと思う。私は「幼児との保育」ということばで、ことある毎にその必要を説いて来た。倉橋惣三氏の言を借りるまでもなく、「安易なことではないが、真の保育であればこの方向へ保育を推進していかねばならない」と私も思う。

今一つの問題は、幼児に接する時、対象の幼児に対して「なぜそういうことをするのだろうか」と考え込んでしまっている事実についてである。そしてこのことを問題にすることが「幼児理解」であるかのように錯覚されているのではと思われる実践報告に度々出会う。これは従来からの学校教育観の根底にあるニュートン物理学であみ出された決定論にもとづくものだと言って過言ではない。なにか因果関係を観念的につくり結果を結びつけようとすることで、恐らく多くの保育者は考えれば考える程、手足がでなくなってしまう。少しも気がかりは解消していかない。昨夏、ある研究会でこのことの矛盾に気付いた先生が、二学期後の実践で、子どもへの接近と接触がスムーズにでき、子どもと新しい出会いを経験しているのを見聞している。そして担任が気にしていたことは、いつの間にか解消してしまっていると報告を受けた。

以上、保育におけるその本質にかかわる根本問題が現実化されずに今日まで「難しいことだ」として事実についての十分な実践的追究がなされずに来ている。研修会などで観念の承りとやりとりに終始している研修にも問題があり、根本的な改革をしていかねばならないのではなかろうか。

（元・洗足学園短期大学）

人間を尊敬することが文化の基礎である

津守　真

敗戦後五〇年の記念の年、私は自分自身が子どもにかかわってきたこの五〇年間をも顧みて、特別に身の引き締まる思いで正月を迎えた。

正月が終わり、仕事が常に戻ろうとした日の早朝、私共は阪神大地震の報に驚かされた。私はすぐに五〇年前の戦争直後、日本中が焼け野原のころを思い出した。

戦争が終わったとき、多くの日本人が平和を決意した。日本の国を二度と戦争をしない平和の国にしたいと思った。五〇年たったいま、身辺を見回すと、子どもの自殺が相継ぎ、学校の中の「いじめ」が社会問題になっている。私共の国は戦争はしていないが、幸

せな社会とは言いがたい。戦争が終わったときから今までの間に、私共の中で何が起こっていたのか。人間が幸せに生きられる社会、文化国家の建設を目指しながらそうなっていないのは何故なのか。

現代のいじめのことを考えるとき、私はすぐに私自身の軍隊の体験を思い起こす。私は大学一年生のときに召集されて兵隊にいった。私共一兵卒が最も苦しめられたのは、下士官の「いじめ」によってだった。彼らは上官にへつらい、階級の下の者には何をしてもいいと考えていた。自分を超越した方（神）の前に人々は互いに対等の存在であるという人間の根底にまでさかのぼって考えようとしなかった。そして国家の名の下に個人的な感情や人間の尊厳を犯した。同じことがいま学校の中で起こっているのではないか。教師は子どものひとりひとりの独自の生き方を尊敬しない。同様に、上級生は下級生を自分の手下として支配しようとする。日本人の集団には、この軍隊の下士官心理が根深く残っている。教育や福祉のように閉鎖的で巨大な集団でそれは特に顕著である。教室という人の目に触れない場所では、大人は自分勝手になり、怠慢になる可能性を常にはらんでいる（ここに子どもの権利条約の意義がある）。

戦後五〇年を経、日本の国は戦争中の近隣諸国に対して、歴史的視点に立って、謝罪すべきことは率直に謝罪せねばならないと私は思う。たとえば南京虐殺も従軍慰安婦も、当時を生きた多くの者は、自分が直接にかかわらないまでも、当然ありえたと考えると思

う。私もそのひとりである。なぜそういうことが起こったのかを身近なことから考えると、私は日本人の集団のこの下士官心理が関係していると考える。

自分が継続的にかかわる保育の小さな集団では、皆が民主的に成長する場をつくるのは比較的容易である。大人も子どもも同じ床の上で、人間として平等の者として立つ。それぞれが自分らしく生き、相手の動きに敏感になるように努めることからそれははじまる。それが保育の場である。すなわち、自分をも他人をも尊敬することがその基礎にある。

子どもの活動の側からこれを考えてみると、子どもがはじめた遊びを尊重されることから、その子らしい次の遊びが生まれる。他の子どももそれぞれに自分らしく遊んでいるのを傍らに見ると、子どもはその楽しさに引き込まれ、そこに共通の活動が生まれる。集団全体が力動的になり、創造的になる。保育者もその中の一員である。そこでだれかが自分の観点を絶対と考えて、相手の考えや動きを無視し、相手を支配しようとすると集団は生命性を失い、画一的になる。

五〇年前の戦争直後、文化国家の建設ということが青年の目標であった。私は子どもの仕事を文化と結び付けて考えた。文化とは何かを分かりもしないままに、障害児の教育は一国の文化のバロメーターであると思った。私は先日、障害の人と共にすることを原則と

するウォルフガング・シュタンゲのワークショップで、ダンスの基礎は、ひとりひとりの人間を尊敬するところにあると彼が明言するのを聞いて、このことがはっきりしたように思った。形がととのって立派でも、人間に対する尊敬がなければ文化としては根の浅いものになる。障害があってもなくても、どの子どもをも人間として尊敬する教育がなかったら、どんなに立派な美術館やコンサートホールが沢山建てられても、それだけでは文化国家とは言えないだろう。

この度の阪神大地震では、日を経るにつれて災害の激しさが知られて来る。沢山の幼稚園、保育園はどうやって立て直されるだろうか、私立の保育者養成機関などはどうやって再建されるのだろうか。どんなに大変か、外部の人の想像に絶するものがあるだろう。しかし、もしかするとこの瓦礫のなかに、戦後五〇年の間に私共日本人が失いかけていた人間の精神が息吹いているのかもしれない。

このようなことが起こった年、八月一日―四日に、ＯＭＥＰ世界大会が横浜パシフィコで開かれる。

阪神大地震から数日後には、元ＯＭＥＰ世界総裁のマデリン・グタール女史から、次の手紙を受け取った。「今日、ラジオが、日本で起こった恐ろしい大地震の報を伝えまし

た。私はショックを受けています。多くの失われた生命、ーその中には多くの子どもたちも含まれているでしょうーの哀悼の中にある、愛するあなたの国を思い、私はこの上なく悲しんでおります。日本のＯＭＥＰの方々の無事を願っています。ことに私の知っている友人たちのことを思っています。私の深い関心と同情の念を皆様にお伝えください。

一九九五年一月十七日」

それから数日の間に、前世界総裁、ノルウェーのバルケ女史、現世界総裁、カナダのピノー女史、イスラエルのジャシック女史、デンマークのヴィリアン女史、イギリスのカーティス女史、イギリスのデヴィッド女史等々から次々にお見舞いの手紙やファックスをいただいた。私共と同じように子どもの仕事をしている方々が、こうして私たちのことを思っていてくださることを考えると不思議である。この前の戦争のときには、心の中で心配して下さっていた方は大勢あっただろうが、こうして直ちにファックスや航空便で安否をたずねられることはなかった。これは技術の進歩だけのことではない。子どものことに同じ関心を抱く人々の国際組織があるからである。ＯＭＥＰを通じて私共は心を通わせ合うことができる。

（愛育養護学校）

動物行動の研究から(1)

動物たちとの対話

柴坂　寿子

「動物の生活する野外の自然のなかに出かけて行き、動物の自然な行動を観察し記述する」。それが動物の行動研究の基本的な研究方法であった。これは原則的には誰もができるような簡素な方法である。それがゆえに、この方法がどのような態度や考えを内に含み、どのような効果を人に与えると思われるのかを少し考えてみたい。

自然の中で研究者たちが動物を見つめるとき、ひとつの仮定があると私は思う。それは、それぞれの種の動物たちは私たちとは違った必要性や世界への意味付けを持っているだろうということである。言い換えれば、目の前に広がる自然も、動物たちには私たちとは違って「見えて」いるだろうということだ。私たちの目には同じように白くしか見えないモンシロチョウのオスとメスを、モンシロチョウは区別できる仕組みを持っている。それはモンシロチョウにとってはこの区別をすることが繁殖の上で重要な意味を持っているからだ。

動物が自分とは違った存在であることを認めた上で、またそれだからこそ、彼らの持つ意味の世界を

理解しようとすること。それが動物行動研究のやっていることであり、それが可能だと仮定することが動物行動研究の出発点なのだと私は思う。そして様々な種の動物たちが違った世界を「見て」いる可能性に気づくとき私たちが感じるのは、人知を超えた世界の豊かさのように思う。

動物たちの意味の世界を理解しようとするとき、私たちは彼らに言葉で尋ねることはできない。動物たちの行動を彼らの必要性や世界への意味づけを表すものとして捉え、彼らの意味の世界を「読み取る」。その時私たちは、自分たちのありったけの感覚のチャンネルを通して意味を読み取ろうとする。

ときには、私たちには彼らが思っていることが、なぜかは説明できないけれど「分かってしまう」ことがある。アヒルの雛が孵化して初めて見た動くものを親と思い、後を追うという話は高校の教科書にも載っている。しかしその様子をフィルムで見ると、知識は了解に変わる。孵化して間もないアヒルの雛は辺りを見回し、鋭い高い声でピーピー鳴き続ける。雛はあるべき何かがないので、不安に感じそれを捜しているということを私たちは一瞬のうちに感じ取ってしまうのだ。そして動くものが雛に与えられると、雛の声はピョピョといった穏やかな声に変わり、動きも落ち着いたものになる。そこから私たちは、何等考えることなく彼らの安心感を感じ取ってしまうのである。

それは信号として音が情報を伝えているわけではなく、声と状況とを連合学習しただけなのでもなく、彼らの声の持っている質が、私たちに安心感や不安感を呼び起こしているように私は思う。彼らは私たちと共通の祖先や似たような環境を持っている存在である。だから私たちが感じ取ってしまうものが、彼らが感じていることに本当に近い可能性は大いにあるのだ。だから不安を感じとった私たちは、雛にとってついて行くもののない状態は不安なものだろうという仮説から出発するだろう。自分自身の

感覚に基づいてこうした仮説を立てることは、時に言われるほど非科学的なものだとは私は決して思わない。ただし、私たちは彼らとは種が違うことも確かである。だから私たちの受け取る感じは、もしかしたら彼らの感じと全く違うかもしれない。それは行動研究者が自分の感覚とは別に、思考の部分で可能性として「考えて」いることなのだ。そしてこの「考える」部分は、動物たちの意味世界を本当に知ろうという意思に支えられているのだと思う。

多くのチャンネルを通して私たちが動物たちから読み取ったことは、必ずしも数的データや言語的記述としてうまく表現できるものとは限らない。こうしたギャップに関して、アフリカでゴリラを研究した山極寿一[(1)]は次のように述べている。「まだうまく記述することのできないでいるゴリラの表情としては、彼らの眼の動きと色合いがある。ゴリラと意思を通じ合うことができると最初に私が感じたのは、まさにこの眼の表情だった。ゴリラは相手の眼をじっと見ることが多い。彼らと見つめ合っているうちに、いつしか私は彼らの表情を読み取り、無意識のうちに彼らの気持ちを察しようとしていた。その判断は決して間違ってはいなかっただろうと、私は思っている。しかし、それをどのように分類し記述したらいいのか、今もって私にはよく分からないのである。おびえた眼、怒った眼、疑わしそうな眼、好奇心に富んだ眼、優しそうな眼、というようにゴリラの眼にはいくつもの表情がある。不安になると眼はきょろきょろ動くし、興味を示すとじっと動かなくなる。怒ったときには眼がきつくなるし、恨めしそうな表情では斜視に見える。彼らの眼の色も、好奇心を持つと輝きが増すように見えるし、怒ると淡色に変わるような気がする。でも、それを記述しようとすると、どうしても擬人的な表現に頼らざるを得なくなってしまう。シャラーやフォッシー（注：著名なゴリラ研究者）も同じ様な壁にぶつかったらしい。シャラーは、ゴリラの眼が情緒の指標とし

て最適であることに早くから気づいていた。しかし、彼もゴリラの眼の表情を、神経質な、うさんくさそうな、大胆な、もの柔らかな、穏やかな、といった表現でしか記述できなかった。フォッシーも、シルバーバックたちに襲われたとき、強い興奮によって彼らの眼の色がいつもの薄茶色からネコの眼のような黄色に変わっていたことを記述しているし、著書にはゴリラの眼の表情から判断したゴリラの心理が随所に描かれている（p. 156－157）」。

動物行動の研究者たちはなるべく主観的な言葉を避け、客観的な言葉で行動を記述しようとしてきた。例えば、「あるチンパンジーが他のチンパンジーに『食物をねだった』」というよりも、「あるチンパンジーが他のチンパンジーに『手をさしのばした』」というように。それは単に科学的という体裁にこだわるからだけではなく、だれもが記述から同じ行動を思い浮かべ、共有できるようにという意図のものだった。『食物をねだる』とだけいったなら、それから思い浮かべられる行動は幾種もあるだろう。しかし山極が述べているように、本来の意図とは逆に、客観的な言葉を使うことによって、観察者が読み取っていることがかえってうまく伝えられないという現象が起こっているのだ。

さらに言えば、私たちが「読み取る」ことのできる動物たちの意味世界を、さらに他の人に伝えるため言葉に変えていこうとするとき、そこで多くの情報が失われてしまう可能性が高いということだ。それは私たちの言語の持つ限界とも言えるだろう。言語の持つこうした限界に関しては、他の分野でも様々な人が指摘している。例えば、ダンス・セラピストとして知られるアナ・ハルプリンは、自分の身体感覚を絵画として表す作業を、「いわゆる言語が表現できないことを第二の言語で表現することだ。いわゆる言語は人類の進化の歴史の中でずっと後になって発達してきたため、人類の経験することをすべて表現できるほどの体系にはなっていないのだと

思う」と説明している。

動物行動研究者たちのジレンマは、科学が言葉の上に成り立っている限り避け得ないものなのだろう。読み取ることから言葉で語ることに移行するときに情報のロスが起こることの自覚と、読み取ったことをより正確に伝達できるような言葉を捜す努力と、そのためには「客観的」といわれる言葉の持つ限界を意識してこれにこだわりすぎない態度とが、自分の観察に正直な動物行動研究者たちのぎりぎりの選択なのだろうと思う。

私たちが動物の行動から何かを読み取ろうとするとき、彼らがその何かを表現しようと意図しているかは問題ではない。しかし、動物たち同士がお互いに積極的にコミュニケーションを交わしているのも事実である。実際、いわゆる言葉を持たない動物たちの「会話」の豊富さは、動物行動学が明らかにしてきたもっとも重要な発見であった。海の中でイカが急速に体色を変えてコミュニケーションを取り合う姿、ある種の鳥のオスがメスに求愛するために、真上にジャンプしては足をバタバタさせながら落ちることを繰り返す姿などなど。何でここまでしてと思ってしまうほど、動物たちは懸命にコミュニケーションしようとしている。その姿は、「コミュニケーションする存在としての動物」を私たちに強く印象づける。授業のなかで動物のコミュニケーションについてのフィルムを見てもらうと、学生たちからは、「以前は鳥が鳴いているのを聞いても、ただ鳴いているとしか思わなかったけれど、今はそれで何を伝えようとしているのかと考えるようになった」、といった感想が多く寄せられるのである。

自然の中で動物たちと暮らしてみた研究者が、感じとっていることの一つは、動物たちの生活の緩やかな時間の流れである。例えば、動物行動学の父といわれるコンラート・ローレンツは「よっぽどの怠け者でないとガンやカモの行動の研究はできない。彼らときたらものすごくのんびりなんだから」と

いっている。ゴリラ研究者の山極も、ゴリラの一日について次のようにいっている。「のんびりしてます。朝だいたいベッドに日が当たるまで寝ている。目をさますと、大きなのびをして、おならをする。それから、こちらが見ていてイライラするくらい、何をするでもなくその辺をのろのろ動いている。腕を組んで、何か考えごとでもしているようにおもむろに歩いたりして、一時間ぐらい過ごす。それから十時くらいまで採食する。（中略）それで十時くらいになるとベッドをつくって午後の二時くらいまで昼寝をします。昼寝から起きると、また二時間くらい休んだり、ちょっと食べたりをくり返す。このあいだに子どもは遊びまわり、おとなは発情していれば交尾をします。四時になると急にガツガツ食べ出す。五時になると寝場所を探し始め、六時にはベッドを作って寝てしまう。だいたいそんな一日ですね」（立花隆[2] p. 230）。南米のホエザルを研究している伊沢も次のように述べている。「それにこれが稀代の怠け者で、一日中寝てばかりいるんです。夜は、夕方の四時ごろにはもう寝てしまう。十六時間も寝て、朝八時ごろ起きる。しばらくウダウダしてから、その辺の葉をつまんで採食する。それが終わるとすぐ、昼寝を二時間ぐらいする。起きるとまたしばらくウダウダしていて、それから食べて寝て終わり。群れ間で吠え合うとき以外、活発な活動らしい活動をまるでしないんです。ですから見ていてこんな退屈なサルはいません。観察する方もハンモック持参で、向こうが寝たらこちらも寝る、という態勢でないと、とってもやってられません」（立花[2] p. 453－454）。動物たちののんびりさ加減に、「研究」という仕事に動機づけられた研究者たちは呆れたり、困惑したりする。しかし、それと同時にその時間の流れにつきあおうともしているのである。

例えばミツバチのように、動物の種類によってはむしろ活発に活動する姿のほうが私たちの目につくものもあるだろう。また、ガンやカモやゴリラやホ

エザルたちがのんびりしているだけなのでもない。彼らも危険がおとずれたときや求愛の時期には活発な動きを見せる。しかし、自然の中で動物たちと共にあることは、私たちがいつも過ごしているせわしない時間とは違った、のんびりと緩やかな時間の流れ方がありうることを私たちに気づかせ、さらにこうした時間の流れの心地よさ、安心感を共に体験する可能性を開いていることは確かだろうと思う。

動物たちにとって自分たちの周りをうろうろしている人間たちはどんな存在なのだろうか。動物たちに人が側にいることに慣れてもらい、人を見ても逃げ出さないようにするいわゆる「人づけ」は、動物行動研究の第一歩である。動物の種によって、この「受け入れ」の困難さは様々である。しかし受け入れが完了すると、思いもかけないほど人と動物の距離が縮まることもある。山極はこんな体験を語っている。

「…雨が強いと、ゴリラはたいていハゲニアという大きな木の洞を探して、そこで雨やどりをするんです。ぼくもそうするんですが、あるとき、ぼくが雨やどりした洞の中に、後からゴリラが入ってきた。〝シリー〟というブラックバックで、かなり大きいやつなんですが、ぼくがそこにいるのを見ても平気で入ってきた。狭いので、場所をゆずり合ってもお互いに向い合わせにくっついて、あぐらをかいて座るような格好でいるしかない。そのうちお互いに眠くなってきましてね、座ったまま眠ってしまって、ゴリラの肩の上にぼくの頭を乗せる格好で、しばらく寝込んでしまったこともありました」（立花(2) p. 228－229）。

野外で動物の行動を研究している人たちのなかには、研究する時間を大幅に犠牲にしても保護活動や動物福祉の活動をする人たちが多い。なかにはこうした活動のほうが中心になってしまった研究者たちもいる。彼らの動機は自分の研究対象がいなくなると困るからという程度のものではない。ゴリラ研究

者であったダイアン・フォッシーは保護活動に熱心だった余り、密猟者たちに逆恨みされ殺されてしまった。チンパンジー研究者であるジェーン・グドールの最新の著書[3]には、彼女が実験施設などで狭い檻の中に閉じこめられたチンパンジーたちを訪問したときの写真が載せられている。ジェーンはチンパンジーに手をさしのべ、チンパンジーもまたジェーンに手をさしのべている。二人の間には深い悲しみと理解し合うもの同士の愛情が流れていて、思わず涙してしまうくらいである。

研究者たちの動物たちとの関わりは、動物たちの生活をじゃませずに観察するという間接的なものだ。しかし彼らに受け入れられ、長い間彼らと同じ環境の中で暮らし、一頭一頭を個別に知り、動物の一生での重要なライフイベントを共有することで、動物と自分とに通じ合うものがあることを強く感じるのではないのだろうか。

通じ合う程度や通じ合うものが何かは、研究対象の動物の種によっても違うかもしれない。また研究者のなかには自分のキャリアだけしか頭になく、動物と自分の関係なんてこれっぽっちも考えない人もいるだろう。それでもなお、長い時間をかけ、動物を自然の環境の中で見つめるという行為には、動物と人の間に通じ合う何かを発見する可能性が大きく開けているのだと私は思う。

（お茶の水女子大学生活科学部）

引用文献

(1) 山極寿一『ゴリラとヒトの間』講談社　一九九三
(2) 立花隆『サル学の現在』平凡社　一九九一
(3) グドール・J.『心の窓』どうぶつ社　一九九四

子どもたちとの生活のなかで

大木　千佳子

朝、電車に乗って幼稚園に向かいながら、私はいろんなことを考える。今日はT児は何をして遊ぶだろうか。昨日の続きでY児のやっているカクレンジャーごっこに入りたいと思うのかな。それとも新しい何かに興味を持つのだろうか。何よりもまず、元気に幼稚園にやってきてほしい。

T児は、心身に障害のあると思われる幼児（特別保育児といっている）として本年度入園してきた。

そして私は、保育者一年目のひよっこ先生。初めて出会ったのがT児と彼が所属する四歳児M組の子どもたち。幼稚園に入って初めてのお正月を迎え、三学期を迎えて二週目の子どもたちは、冬休み中に家で経験したことがあるカルタを友だちと始めたり、二学期に楽しんだ遊びを友だち同士で誘いあって始めたりしている。そんな中でT児は、友だちと一緒がいいという思いを持ち始めているようだ。

さあ、今日はどんな一日になるだろうか。登園してきた子どもたちと挨拶を交わしていると、自然に心が高揚してくる。少しゆっくりめにT児が登園してきた。「おはよう」と声をかけると私をちらっと見て、それから保育室の中を見回して、朝の身仕度を始める。今日もT児の園服は裏返しのままかかっている。この頃はよくこのようなことがある。

そういえば、T児は入園式のときは園服が嫌で着なかったんだっけ。二週間ほどして園服を着たら今度は脱ぐのが嫌になったんだっけ。そして、二学期の中頃初めて自分から園服を脱いだ日の帰りには、お母さんの顔を見るなり「今日園服脱いだよ」と自分で報告したんだっけ。ハンガーにかけるときには脱いだときに裏返しになった園服を表に戻し、ハンガーから園服がずり落ちないようにボタンをかける必要がある。それを始めは私にやってもらい、そのうち担任のもう一人の保育者にやってもらいにいくようになり、そのかかわりの中でT児はテーブルの上でボタンかけができるようになった。裏返しにするのは何度かやっても難しくて、ハンガーと裏返しの園服を持って担任のところに行くのだが、他児と話をしている様子になかなか自分の要求を言えない。そしてT児自身が皆と同じペースでやっていくために考えついたのがこの方法なんだろうな…。T児がハンガーに園服をこのようにしてかけるようになるまでのことを思いながら、また、T児が誰か友だちと一緒にいることを願いつつ、私はT児のいる屋上へ行く階段を上がった。

屋上では、T児は鉄棒の近くでN児、S児がおしゃべりしているのを聞いている。そのとき、大きなサイレンの音が聞こえてきた。その場は一瞬静かになり、誰かが「小学校の地震の練習だ」と言う。幼稚園の向かいにある小学校の避難訓練のサイレンだったのだ。ちょうど数日前に起きた兵庫の地震の話題になり、「地震で火事になったんだよ」「おうちがこわれたんだって」などと、自分の知っている情

報を話している。私が「みんなみたいに幼稚園に行っている子どもも、おうちがなくなってごはんも少ししか食べられないんだって…」と言うと、「おうちがないと寒いんじゃない」「着る服はいっぱいあるのかな」「きっと燃えちゃったよ」「かわいそう」「うちの服送ってあげたい」などと、しんみりして話す。大地震のことを、四歳、五歳の子どもたちなりに受けとめて、心配している。私も子どもたちと一緒に兵庫の人々のことを思いながら、この子どもたちの感じる心を大切にしたいと思った。

やがてT児らは保育室に戻り、H児、K児のしていたカルタを一緒にし始める。「先生読む人になって」と言われ、私は読み手になる。ところが、字の読める子どもは最後まで読まないうちにとってしまうので、つまらなくなって抜けそうになるK児。「ね、Nちゃんに負けないようにがんばろうよ」と声をかけて励まし、私なりに他児もとれるように読み方を工夫してみる。早く手をのせたほうが勝ちというきまりになっているのが、T児には理解できないようだ。「Tがみつけたの」とすねそうになる。しかし友だちに、「いまのはSちゃん」と言われると素直にそれを受け入れている姿も見られる。次はさっきからT児が気に入って手にとっていたパンダ

の札。私はT児に「次を読むよ。よーくカルタを見て探すのよ」と言う。そしてパンダの札をとることができたT児。真剣な表情から、パッと変わって嬉しそうな表情になる。「Tちゃんさっきから見てたパンダがとれたね」とそっと声をかける。「とられちゃった」と言う友だちの声に、にこにこして札を皆に見せる。好きな友だちとカルタとりをして「とれた」という喜びを感じたT児。そしてそのそばにいて共に喜びを感じられるとき、私はやっぱり保育者になってよかったと思う。

カルタとりを続けているとO児が「遊戯室でカクレンジャーショーをやります。見にきて下さい」と言う。「あ、見たい」「何時からやるのかな」「聞いてくる」と言い、H児が遊戯室に行く。戻ってきて「長い針が四のところからだって」という声に、「じゃ、終わってからで間に合うね」と再びカルタとりを続ける。そしていったん終わって片付けてから見にいく。以前ならカクレンジャーと聞くとカルタそっちのけで飛び出していくか、全く興味を示さずにカルタを続けるかだったように思う。自分のやりたいことがはっきりしてきてそれをやり遂げようとしながら、友だちのしている遊びにも興味を持って見にいくようになった、子どもたちの成長を感じる。

遊戯室では、男児五人が舞台の上でカクレンジャーになって、それぞれが思い思いにポーズをとっている。それを見ていた女児が「私たちセーラームーンやりたい」と言う。やりたい同士集まって、それぞれ自分のやりたい役を言い合っている。自分のなるものを決めたとたんに嬉しくなってとびはねるR児、「Mちゃんはセーラーマースね」と他児の役まで気がまわるC児、何になってどう動いていいかわからず戸惑うM児と、いろんな子どもがいる。T児も自分の好きなY児が入っているのを見て「やりたい」と言う。舞台に立った子どもたちに保育者が「では何の役かひとりずつ言ってください」

と言うと、それぞれに自分のなりたいものを言っていく。いちばん最後に並んでいるT児、少しドキドキしながら自分の番を待つようすがうかがえる。私は「Tちゃんがんばれ」と心の中で応援しながら見ている。いよいよT児の番だ。ちょっと緊張した表情で「…セーラームーンです」と言うと一瞬、笑いが起こる。「男がセーラームーンだって」「Tちゃんは赤ちゃんのはずだったでしょ」などという声が聞こえる。T児はこわばった表情のままだ。私は少し大きな声で「うそっこだと男の子でもセーラームーンになれるんだね。おもしろい」と笑う。するとまた笑いがおこり、T児の表情もやわらかくなった。こうやって、皆で笑い合えるとき、私は子どもたちとの心のつながりを感じる。ショーの歌を皆で歌い始めるが、歌を知らなくて不安そうな表情になるT児に、私は観客席から笑顔の声援を送る。T児を見ながら頷き励ましていると、T児は隣のY児を見ながら口の動きを真似し始めた。皆と一緒に、自分のやりたいと思ったことをやれたT児。その後片付けをしながら私はT児に「Yくんやみんなと一緒に歌えたね」と声をかける。T児はちょっと照れくさそうに笑って、椅子を運び始めた。T児の成長を感じてなんだか私のほうが胸がいっぱいになっていた。

私が「先生」として、初めて出会う子どもたちの成長をいろんな場面で感じる日だった。明日、私がどうすればもっと子どもたちがセーラームーンショーを楽しめるのだろうか？　そんなことを考えながら庭を掃く。すぐに答えは出ないで、帰りの電車、お風呂の中や布団の中で今日のできごとを思い、また考える。そんなふうにして、今日も一日が終わっていく。ひょっこの私もそんな生活にやっと慣れてきたかな…と感じる今日この頃である。

（東京都文京区立第一幼稚園）

にわとり小屋でのひととき

椎名　裕子

新入園児も少しずつ幼稚園に慣れてきて、また年長児もようやく生活に落ち着きを見せ始めている。新入園児に比べると、やはり年長児は自信に満ちている。「年長になったんだ」という誇らしさがあちらこちらで感じられたりする。幼稚園で飼っているにわとりの世話も、「年長になったからできる！」という自慢の仕事の一つで、にわとりの好きな子、世話をしたい子が、毎朝欠かさずにやってくる（ちなみにうちの幼稚園では、当番ではなく、世話をしたい子が世話をすることになっている）。

キャベツを切って、水を取り替え、小屋の掃除をする…。五～八人程で、二〇分余りの作業である。

初めのうちは、慣れない包丁に冷や冷やしたり、にわとりの鳴き声に驚いたりしながらも（実のとこ

◀キャベツを切って…、包丁さばきもなかなか

ろ私はにわとりがあまり好きではない)、次第に慣れてくると、にわとりの世話以外の楽しさがあることに気が付いた。それは、子ども達がにわとりの世話をしながら、いろいろな会話をしているということだった。子ども達との世間話は結構楽しいものである。「にわとりの世話は大変だ!」と思いつつも、この子どもたちとのささやかなひとときを求めて、にわとりの世話を頑張っている(最近にわとりが平気になってきた)。

ある日の会話…

①餌をどうあげようか?

にわとりたちは、毎朝餌を楽しみにしている(に違いない)。特に月曜日の朝などは大騒ぎである。中には、子ども達が餌箱を置くのを待ちきれずに飛び掛かってくるのもいて、これがなかなか怖い。にわとりに足を踏まれるくらいは序の口で、手にもった餌箱に飛び掛かられると思わずすくんでしまうこ

ともある。初めのうちこそ、小屋の中に入れる勇気ある（？）友達に頼んで餌箱を置いてもらったりもしているが、子どもたちは、少しでも餌箱を安全に（？）小屋の中に入れようと、いろいろな方法を試みている。

〈その1〉

まず、にわとりが水を飲んでいるうちに、とにかくサッと置いてくる（しかし、そうはうまくいかず、にわとりは餌箱をめざしてとんできてしまった）。

〈その2〉おとり作戦

誰かが小屋の外でにわとりの気を引く。そのすきを狙ってサッと置いてくる（これはさらに改良されて、外から少しの餌を撒いてにわとりの気を引くということになった。これはかなり効果的でよく使われている）。

▲おとり作戦

〈その3〉ガード作戦

二～三人がかりで小屋の中に入り、にわとりが飛んでくるのを防ぎながら、餌箱を置いてくる。みんなとても慎重である。

「あのにわとりはいつも僕にとんでくるんだよ。だからあのにわとりは、苦手だなあ」と呟く子もいるけれど、友達とワイワイしながら取り組むうちに少しずつにわとりを怖がらずに、餌箱を置いて来ることができる子どもが増えてきている。また、自然と友達と協力し合うことを経験したり、「○○ちゃんに助けてもらった」と友達の良さに気付くきっかけにもなったりしているようだ。

②どっちが強い？

ここ数日、どうもにわとり小屋では喧嘩が絶えない。子ども達もにわとりの喧嘩に頭を悩ませている。おんどりがめんどりを盛んにつついているのを見て、

私「うーん。やっぱり、オスのほうがメスよりも強いのかなあ」

Mちゃん（キャベツを切りながら）「にわとりは人間と違ってオスの方が強いんだね」

私「そうそう、オスの方が…、えっ？　Mちゃん、今『人間と違って』って言わなかった？」

Mちゃん「うん、そうだよ。だって人間はお母さんの方が強いじゃん」

―しばしの沈黙―

私「ねえMちゃん。お父さんとお母さん、どっちが強いの？」

Mちゃん「お母さん！」

私「！！！」

K君「僕のうちは、お父さんが強いよ」

S君「僕のうちも。でもね、お母さんに時々おこられると『ごめんなさーい』って言うんだよ」

みんな「えー、おかしいの。ワハハ…」

こんな楽しい会話を聞きつけて、隣の事務室から

も「何おかしいお話してるの」と事務の先生も飛び入り参加。あれこれと家族談義に花を咲かせたひとときとなった。もちろんこの日のにわとりの世話はかなり時間がかかってしまったが…。

③『ラッキー　クッキー　？？？？』

「ラッキー　クッキー　ポッキー」　正解！
「ラッキー　クッキー　ユウキー」　ピンポン！
「ラッキー　クッキー　マークン」　ブブー！

にわとりの世話をしながら誰ともなく始まった言葉遊び。

「ラッキー　クッキー　ツミキ」　ピンポン！
「ラッキー　クッキー　にわとり」　ブブー！

ほうきを片手に「ラッキー　クッキー　…？」とぶつぶつと考える子ども達。余りに考え過ぎて掃除をするのを忘れがちになってしまうこともある。けれどなんとなく楽しい。「ねえ早くやって遊びに行こうよ」となかなか言えず、にわとり小屋の中で子

▶楽しくおしゃべりをしながら…

ども達と一緒に「ラッキー　クッキー　…？」。

にわとりの世話のように子どもにとっては仕事の時にも、耳を傾けようとすれば、本当に思わぬ発見やおもしろい話を探すことができる。

以前はにわとりの仕事を早くきれいにしなければという気持ちばかりで子どもに接してきたように思う。だからなかなかこうした子どもの会話が耳に入ってこなかった。しかし、ちょっと気持ちを変えて、子どもと楽しい時間を共有しようとすれば、思わぬことに気付くことができるのかもしれない。特に年長児は本当に会話が多くなって、ちょっとしたところでも子ども達のおもしろい会話に出くわすことがある。「へー、○○ちゃんってこんなこと考えていたんだ」とか、「今の子ども達の話題はこんなことなんだ」など、いろいろな発見がある。お弁当を食べている時でも、「赤ちゃん、かわいいでしょう」の問いに、「もう大変だよ、泣いてうるさいし…」と思わぬ子どもの本音？　が聞けることもある。こうした子どもの世間話には、遊びの中での会話とはまた違ったその子らしさがにじみでているように思われる。一日の幼稚園生活の中には、きっと子ども達の楽しさがいろいろな所で見られているのだろうけれど、耳を傾ける余裕がなくなってしまっているようで、なかなか見付けられない。今年は、子ども達のおもしろさをひとつでも多く見付けられたらいいなと思っている。そのためにも、アンテナをはりめぐらせていきたいと思う。

（千葉大学教育学部附属幼稚園）

お母さんの サンタ大作戦

宮里　和則

ここは東京、品川のＪＲ大井町駅そばにある大井倉田児童センター。

ここには赤ちゃんから高校生まで、そしてそのお母さんたちや若者たちが集まってくる。遊ぶことで仲間ができ、学びができていく。それが児童センターである。

ここで子どもたちやお母さんたちと様々な活動をする中で、まちのおもしろさ、人間のおもしろさをつくづく感じることがある。

今日お話しするのは幼児クラブのこと。幼児クラブはお母さんたちと職員で企画・運営していくクラブである。〇歳から二歳までのクラス、二歳児クラス、三歳児クラス、と現在三つのクラスが週一回活動している。ここでのお母さんの動きを見ていると、そのパワーに驚かされ、このまちの未来は明るいと感じさせられることが多い。

さて、その三歳児クラスのことである。

〈ラーメン屋のサンタ〉

十二月のある日。いつものように階段に座り、みんなで本を読んでいた。本は『ノンたんーサンタクロースだよ』（大友康匠作・偕成社）。

その時、突然、

「ねえねえ、カドのラーメン屋さんで赤い服を着て赤い帽子をかぶって、白いヒゲをはやした人がラーメン食べてたわよ」、

雄司君のお母さんがかけこんできた。

「それ、サンタクロースだよ！」

「そうだよ、サンタだよ」

子どもたちは口々に言いだした。

「そうだね、そうかもしれない。見に行こうよ」

お母さんたちが、待ってましたとばかりに言った。

〈作戦会議〉

はじめは何気なかった。幼児クラブのクリスマス会をどう行うかのお母さんたちの話し合いが図書室で行われていた。サンタクロースの出方の話で、

「ラーメン屋さんでサンタがラーメン食べていたらおもしろいよね」、そんな話題が出たとたん、話し合いは白熱していった。

「サンタクロースを探し歩いて、児童センターに戻ってくると、さっきまで遊んでいたところがパーティー会場に変わっているなんてのはどう？」

「じゃあ、階段の所にサンタの足あとなんかがあったらいいわよね」

こうしてお母さんたちと私たちの「サンタクロース大作戦」が始まったのだ。

〈まちはおもしろい〉

子どもたちは、ラーメン屋さんに急いだ。ラーメン屋ミニ亭は、本当はまだ開店の時間ではないのに私たちの熱い（？）思いにこたえ、わざわざのれんを出し店を開け、ラーメンを作りながら子どもたち

を待っていてくれた。
「すみません…。赤い帽子をかぶって、赤い服をきて…」おずおずと話しだす子どもたち。
「サンタクロース知りませんか？」賢幸君が元気に聞いた。
湯気の向こうからおじさんがこちらを向いた。
「ああ、サンタ。サンタならもうラーメン食べて、おじぞうさんの方へ行ったよ！」
顔を見合わせる子どもたち。もう走りだしそうである。おじさんの熱演にお母さんたちも私も、そしておじさんもニヤニヤ。心の中でウインクしている感じだ。
「どうもありがとうございます」「ありがとう」、子どもたちは元気いっぱいである。
カドを曲がると文房具屋三松堂。おばさんが外に出て待っていた。おばさんはニコニコしている。
今度は栄一郎君たちが小走りに近づき、話しかけた。
「サンタクロース知りませんか」
「そうね、さっきあっちの方へ行ったわよ」三松堂のおばさんは中腰になって答えてくれた。
このことがとてもうれしかったのか、子どもたちはその後、次々とまちの人に話しかけていく。薬局のおねえさん。まちを行くサラリーマン。工事のおじさんたち。
「サンタクロース見ませんでしたか？」
「さあ、見てないなあ」
お願いしていたのはラーメン屋さんと文房具屋さんだけなので、もちろんみんなそう答える。しかし、子どもたちは答えが何であるかもう関係ない。気分はすっかり探偵である。
長い歩道橋を渡っていると、真弓ちゃんが言いだした。
「ソリの音が聞こえたよ…」
すると、奈穂ちゃんが、
「今、赤いのが空をむこうからあっちへとんでいっ

◀「サンタクロース知りませんかぁ？」

た」と言いだしたのだ。

見上げると。まっ青な雲一つない空。確かに、こんな日は赤いソリが空をよこぎっていてもおかしくない。そして、とても美しい光景だろうと思えてしまう。

「ぼくも見た」という子まで現われた。

子どもたちのイメージは様々な魔法を現実のものにしてしまう。

〈あっ、サンタだ〉

さて様々な遍歴の末たどりついたのは中央公園。

「あっ、あれ！」

見ると公園の一番奥のベンチで、赤い服、赤いズボン、長グツの人が新聞を読んでいる。

「いたっ、サンタだっ！」

駆けていく子どもたち。しかし、三メートルぐらい手前で止まってしまう。そして不審そうにその人を見る。

その人は新聞をおろし、こちらを見る。赤いベレー帽とサングラスをかけている。ちょっとこわい。

そしてゆっくりサングラスをはずすと…。

「ああ、てるちゃんのお母さんだ」

「あら、みんなどうしたの？」

てるちゃんのお母さんがトボけて聞く。引率のお母さんたちは大笑い。

「おばさん！　何してんの？」

サングラスの姿がこわかったからだろうか、てるちゃんのお母さんをたたく子もいる。

「おばさんは新聞読んでいたのよ。みんなはどうしたの？」

せっかくサンタを見つけたと思ったのにと、ちょっと落胆気味で、子どもたちは答える。

「サンタをさがしてたの…」

「サンタ、サンタなら見たわよ。さっき、この公園でトナカイ散歩させていたわよ」

▶サンタと思ったら…「てるちゃんのお母さんだ」

「エエッ」

〈金のスズ〉

手がかりをさがし公園を歩き回る子どもたち。その時、壮君が「こんなの見つけた」と言って、金色のスズを持ってきた。

上にかかげみんなに見せると…、

「ここにもある」「あったよ」と、次から次へと金のスズが発見された。おそうじのおじさんたちも、

「向こうにたくさん落ちてたよ」と教えてくれた。

「これ、サンタのだよ、きっと」と女の子たちは話している。そして、

「これがないと、サンタは空とべないんじゃないの…」と奈穂ちゃんが言いだした。

そうだったのか、私も知らなかった。彼女の中で空をとぶサンタのソリは、グングンとイメージを広げているのだ。金のスズの魔力で空を飛ぶという話は、考えてもいなかった話だが実に説得力がある。

「そうかもしれないね。サンタに返してあげなきゃね…」、私はみんなに話した。

すると、お母さんが偶然にも（本当はよくわかっていてだが）公園の別の入り口からつづいている矢印を発見したのだ。

そこで、矢印をたどって、さらに探険はつづいていくのであった。

矢印は児童センターまでつづいていた。そしてセンターの玄関からは、秀和君のお母さんのアイデアのダンボール製のサンタの足跡（？）が二階へとつづいていたのだ。

足跡をたどり、子どもたちは階段をのぼっていった。足跡は図書室までつづいている。図書室からはクリスマスソングが漏れ聞こえている。中のお母さんたちも息を殺しているのだろうか。とても静かである。

「（中に）サンタがいるかな…」

そおっと、のぞいて見ると、中は…。
パーティー会場だっ！
色とりどりのリボンがわたされ、金銀のモールが壁を飾っている。テーブルにはお菓子、フルーツ、ケーキ！　そして奥にはダンボールで作られた小さな家。これがあの図書室なのだろうか。お母さんたちの力作である。
サンタクロースは中にいなかった。でもここで待っていたらきっと来るだろう。そんな気がする。

まっかなお鼻の　トナカイさんは
いつもみんなの　笑いもの

みんなはサンタをよぼうと歌を歌った。明夫君のアイデアで金のスズをならしながら歌った。
すると…
ガラガラガラ、と扉が開き、
「メリークリスマス！」

▶サンタに金のスズを返したんだ…

「サンタクロースだ！」
お母さんたちの大作戦、大成功であった。

☆

扉のカギは二つあったように思う。
一つは「ラーメン屋さんでラーメンを食べているサンタ」のイメージである。
サンタクロースが食事をするなんて。それもラーメンを食べているなんて。フーフー言いながら、白いヒゲにつゆをとばしているのだろうか。ラーメン屋さんの店内で。あの赤い服はどんなにか目立つだろうか。
日常と非日常のゴチャまぜ。その落差が、お母さんたちの遊び心（いたずら心）を刺激した。祝祭のような勢いで、サンタ探しを作り出すのりを生み出したのだろう。そして、まちと出会うきっかけともなった。
もう一つは、子どもたちの「サンタクロース知りませんか？」のよびかけ。
まちの人は、この言葉に（この道ゆきを知っている人でも、知らない人でも）ほとんどほほえんで答えてくれる。どんな大人の心の中にも、子どもたちのこんな遊びにつきあう気持ちが、きっとあるのだ。
「子どもっていいな」と大人たちはほっとし、やさしくなるのだろう。そして、その時、同時に子どもたちは「大人ってやさしいな」と、大人への信頼を深めていっているのではないだろうか。
ゆげのむこうのラーメン屋さんのやさしいまなざし。腰をかがめて話してくれた文房具屋のおばさんの顔。工事の手を止めて、子どもたちに振り向いて答えてくれたおじさんたち。そんなまなざしにふれる時、子どもたちはこのまちにあたたかく守られていると、つくづく感じる。
まちってやっぱり素敵だな。人間ってやっぱりおもしろい。

（大井倉田児童センター）

保育実践のパイオニア――氏原銀(1)

守隨　香

一八五八年（安政六年）、江戸三田古川の青木藩邸で西山銀（後の氏原銀）は誕生した。父親は士族西山明教、母親は鈥という。母親は妊娠中、鬼子母神に安産を祈願したところ、神符に銀太郎と書いてあったので、てっきり男の子だと思いこんでいた。生まれたのが女の子と知って驚きはしたものの、両親は歓んでこの生命を迎えた。父親は宝蔵院流槍術や表層術が巧みで、更に詩作・謡曲など多才な人物であったらしい。また、贅沢をつつしみ、家族には徹底して服従させる厳格な父親であった。

当時は、技芸の稽古を六歳の六月からはじめるのが上達の秘訣といわれていたから、銀も六歳の六月から早速、家庭で習字の稽古をはじめた。九歳になると詩吟も習った。週一回、三〇余町（約三・五km）離れた稽古場へ通うのは、幼い銀には辛いことだったが、たびたび父親が銀をおぶって夜道を歩い

たという。子煩悩なやさしい面もあったのである。

母親は、諸礼式・折り方・結い方・生花などを鋹に手ほどきしていた。池のほとりに咲く花に手をのばして池に落ちたり、メダカをとろうとして池に落ちるような活発で男まさりな鋹に、冷静で沈着な気質を養おうとしていたのだ。後述する鋹の、大変に変動の激しい人生を眺望すると、この母親の願いどおりにはならなかったと言わざるをえないが、厳しい稽古と両親の愛情が、体力・努力・精神力の支柱となって鋹を支えつづけたことは確かである。

一八六八年、鋹十歳の年に、日本は明治維新を迎えた。東京藩邸在住の家臣は皆、国元の摂州麻田村へ移る。大阪から北へ四里離れた麻田村へ、西山家も転居した。麻田村での生活が始まった。十一歳になると鋹は、父親から漢籍と楷書を習う。女子は料理・裁縫といった家事に関する手習いが一般的だったから、男子と同等の学問をほどこす西山家の教育方針には嘲笑の声も高かった。だが、その家庭教育が培った鋹の強い信念と父親への服従心で、ひたすら多くの習い事に励むことができた。両親、ことに父親が鋹の人格形成に与えた影響は大きく深い。

一八七五年、十七歳の鋹はチフスをわずらい、一時は重体にまでなる。幸い全快し、親戚を集めて盛大な祝宴が催された。北の新地から芸妓を呼び、料理人を招いたという逸話から、西山家の裕福さが想像できる。その後まもなく氏原知正との縁談がもちあがり、急進展する。実はこの縁談に鋹自身は気が進まなかったのだが、両親のすすめを受けて承知した。この年の秋、鋹は結婚して氏原鋹となる。夫は大阪医学校に在学中だったため、舅姑に仕えて家事に専念する、鋹にとってはむなしい生活が始まった。幼い頃から両親の教育方針でさまざまな学問的素養を身につけてきただけに、家事に専念して家族に尽くす生活では満足できない人だったのだ。

そんなおり、実父の知人が、西区の小学校で女教員を募集しているという知らせを運んできた。氏原

は喜々とした。が、嫁の立場として勝手なことは許されない。そこで実父が、妻の就労は勉学中の夫にとって励みになること、また家事雇い人の賃金も教員棒給でまかなえるから心配ないことを理由に、氏原父を説得した。氏原父が実父の親心にうたれ、認めたおかげで氏原は、家事専業の生活から解放されて西区堀江小学校助教になれたというわけだ。女性が職業をもつことは、昔も今も、家庭生活によって左右されることが多分にあるものだ。この就職が保育への道につうじたのだから、日本の保育実践をきり開いた氏原鋹は、家庭の事情と時の運によって生み出されたといえるかもしれない。教員生活で必ずしも経済的に恵まれたわけではないが、広い知識と体験を生かすチャンスとなったにはちがいない。

同小学校の訓導となった氏原は、一八七八年、大阪府費で東京女子師範学校附属幼稚園（以下、附属幼稚園とする）へ、保育見習いに行くよう命じられた。辞令を出した渡辺府知事は「大阪は商業地だから、子供の頃から正直といふことを叩きこまねばならぬ」[1]との考えから教育を重要視していた人物で、附属幼稚園を参観して、ぜひ大阪にも幼稚園がほしいと考えたのだった。附属幼稚園に保姆を派遣してくれるよう頼んだが、あいにく適当な人がなかった。そこで大阪から小学校訓導を二名選んで、見習いに行かせることになった。この二名というのが、氏原鋹と木村末である。大阪府内の小学校訓導中、なぜ氏原と木村が選ばれたのかはわからない。

ともあれ二人は、同年二月に上京した。道中での様子は『日本幼稚園史』[2]に記されてある。二十歳の氏原はこの時すでに妊娠していた。周囲の者はもちろん、本人すら気づかないまま上京したのだが、もし出発前に事実が判明していたら、氏原は保育見習いを辞退したかもしれない。幼稚園草創期に普及の労をにない、発展に寄与した大いなる保姆は、ここに存在しなかったかもしれないのだ。

上京するとすぐに、附属幼稚園監事の関信三を訪

ね、到着を報告した。住まいは附属幼稚園保姆近藤濱宅となる。以来氏原は、公私にわたって近藤の指導・援助をうけるのである。

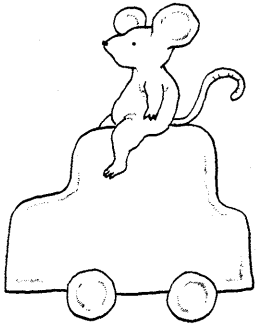
東京女子師範学校は大阪府に対し、保育見習い生の受け入れを約束したものの、これほどすぐに上京するとは予想外で、規定や時間割など何一つ準備をしていなかった。一日も早く幼稚園をつくりたいと急いだ大阪府側と、「ただ簡単に挨拶してしまった丈けで」③のんきに構えていた学校側が好対照でおもしろい。とりあえず形ばかりの入学試験を行い、正式に入学を許可してから登校日までの数日間に、あわてて必要な準備をととのえた。就学期間は、大阪府との間で六か月と決まっていたが「到底六か月では物にならぬ④」と判断し、十か月とした。ここにきて保姆養成の重責を感じはじめた学校の姿勢とみていいだろう。

実施された科目は次のとおりである。

（　）内は指導者名

・実地保育
・音楽　（宮内省伶人）
・保育法　（松野クララ）
・幼稚園記並びに保育法　（豊田芙雄）
・手技製作　（近藤濱）

実地保育は附属幼稚園の保育に参加するかたちで



毎日行われた。そのあとで講義や実技指導がされたのだ。音楽は、唱歌と和琴があった。唱歌といっても幼児のためにつくられたものなどない。歌詞は翻訳の漢文調だし、曲も雅楽調ばかり。とても保育につかえない。それで、歌詞はほとんど創作に近いほど豊田・近藤が手を加え、伶人が作曲して唱歌をつくった。その上で伶人の実技指導をうけたのだから、唱歌を保育に用いるまでには相当の苦労を要したのだ。

松野の保育法は、フレーベルが考案した恩物の理解が主な内容だった。松野はドイツ人で、フレーベルの教えをうけた女性である。日本語が話せない松野の講義は、関が通訳しなければならなかったから、二人がそろって出勤しなければ休講になってしまう。実にはかどらない講義だったと、氏原は後に述べている。

豊田の保育法は、フレーベルの保育理論であり、近藤の手技製作も、やはり恩物の使用法であった。

保育見習いという形で行われたわが国最初の保姆養成教育は、幼稚園に恩物がいかに重要であるかを説き、恩物の使い方に熟達することに終始したといえよう。明治期を貫いた恩物偏重の保育思想は、この保育見習い教育と、後の氏原らの保育実践に源があるようだ。

一八七八年八月末、氏原は実母の出迎える大阪駅に、身重のからだで降りたった。十か月の見習い期間を中途で退学したのだ。自由のきかないからだで単身の旅だったため、近藤が並々ならぬ配慮をした。まず、附属幼稚園助手の山田某宅へ行き、大阪まで付き添いをしてくれるよう頼んだ。山田は承諾した。だが、往復の旅費が負担であることに気づいた近藤は、思い直して郵船会社へ出向く。同乗者の中に車中付き添ってくれる人がいないかと探したところ、幸い適任者が見つかったので、さっそく依頼に足を運んだ。そして改めて、今度は断りのために山田宅を訪ねたのだ。親切で献身的な近藤の人柄

は、明治期の日本の社会が求めた女性像と重なるばかりでなく、こと保姆の資質としても当時はそういった部分を最重要視したのではないだろうか。

無事に大阪の実家へ帰った氏原は、府立幼稚園取調兼第一番中学校勤務を申しつかる。中学校では国語科を担当したが、同年末までの短い勤務であった。

十一月、実家で男の子を出産する。本来ならば氏原家にとっても喜びの初孫誕生であるはずが、上京してから妊娠がわかったことから氏原家にあらぬ誤解が生じ、氏原は不穏な空気の中で涙を流す日々が続いた。嫁としてひたすら忍耐し、誤解のとけるのを待つほかはなかったのだ。

氏原が保育の先駆者として後々まで活躍することは次回に述べるが、仕事にうちこむかたわら、彼女は結婚生活にも翻弄していた。現代女性の多くが抱える「仕事と家庭の両立」という難題は、遠い明治に生きた一保姆の人生にも見出すことができる。

一八七九年十二月、大阪府に悲願の府立模範幼稚園が開設した。園舎・園庭の設備は、大阪府の意気込みを反映した見事なものだった。一足先に帰阪していた氏原と、見習い期間を終えて帰った木村とが中心的に開設準備をしたことはいうまでもない。開設準備にあたっては、関が、帰阪する木村のため加筆・修正して手渡した自らの著書『幼稚園創立法』が、参考に役立てられた。

――つづく――

（お茶の水女子大学大学院）

参考文献

①『幼児の教育』第26巻　7・8月号　P．92
②『日本幼稚園史』臨川書店　一九三〇　P．118～120
③　同右　P．117
④　同右　P．119

「言葉」が幼児理解の壁になるとき

入江　礼子

「おしっこ！」

やっとこさっとこトイレでオシッコができるようになった幼い子どもの母親や保育者は、この言葉を耳にすると、とるものもとりあえず、「それっ！」とばかりに子どもを小脇に抱えてトイレに飛び込む。「ジャーッ」と勢いよく出るオシッコを見るとほっと一安心。「やれやれ、この子もだんだん人間らしくなってきたかな」と一人つぶやく。

こういうことは、子どもと共に生活をした人なら一度ならず出会う場面であろう。私たち大人にとって、「オシッコ」「ウンコ」という排泄に関する言葉は、特別な響きをもって耳に届く。子ども自身がうまく自分の排泄をコントロールしたとき、大人はなんだか子どもたちが人間としての自立に向けて、着実な一歩を踏み出したように思い、安心感とも嬉しさとも言えぬ気持ちに包まれる。

このことは、確かに真実の一面を持っている。ところが、ここに意外な落し穴があるのだ。

〈エピソード1〉

愛育養護学校家庭指導グループ。ここにB君という九歳になる男の子がいる。普段は普通学級に通いながら水曜日と土曜日だけグループに通ってくる。B君が「オヒッコ」と言ってオシッコを教えてくれるようになったのは、ここ一年半のこと。お母さんも保育者も嬉しくて嬉しくて、B君が「オヒッコ」と言うたびにいそいそとトイレに連れて行く。

それが、ここ二〜三か月どうも様子が違う。身をよじっておしっこに行きたそうにして「オヒッコ」と私たちを呼ぶ。「まあ、おしっこなのね。じゃ、トイレに行きましょう」と、私たちは何の疑いもなくトイレに直行しようと思うのだが、当のB君がトイレとは反対の方向に歩き出してしまう。

「あれっ？　おかしい。あんなにトイレに行きたそうにしているのに、行かないなんて。行きたいのは間違いないのだから、ともかくトイレに連れて行こう」こう決心した私は、「B君、おしっこでしょう。行きたいんでしょ。漏れないうちにトイレに行こうね」と声をかけ、手をつないでトイレに向かって歩き始める。最初の二〜三歩はよかった。でもまた反対の方に行ってしまう。相変わらず、体はオシッコに行きたいようというようによじれている。こんなことを二〇分くらい繰り返した。

「せっかく、おしっこがトイレでできるようになったのに、このままB君のあとをついてばかりいては、おしっこが漏れてしまう。せっかくできるようになったおしっこ、グループで漏らしたと聞いては、B君のお母さん、がっかりされるだろうな」、こんな思いが一瞬私の胸をよぎった。

「やっぱり、でちゃうといやでしょ。トイレに行くわよ」、とB君に声をかけ、ついに私はひきずるようにトイレに連れて行った。パンツを下ろした瞬間、出るわ出るわ。やっぱりオシッコだったのだ。

けれど、ほっとしたのは私だけ。B君はオシッコを終えると、何事もなかったかのようにトイレを後

にした。その日、私とB君の関係はそこで切れた。

この日、私は落ち込んだ。「B君がトイレに行きたいことには間違いなかった。『オヒッコ』と言って知らせてくれたのも事実。でも何かが違う」この思いはしばらくの間、私の心から離れなかった。B君はいったい私に何を言いたかったのだろう。

無意識のなかに潜む「生活習慣の自立」という視点

私たち大人は、意識しているいないにかかわらず、幼い子どもたちが「オシッコ」や「ウンコ」を言葉で教えてくれ始めるかなり以前から、子どもたちの体のリズムを見計らってトイレに連れて行く。出なくて当たり前なので、出れば思わず「上手にできたわねえ」と歓声をあげ、思いっきりほめる。初めのうちはきょとんとしていた子どもたちも、やがて母親や保育者の満面の笑顔を見て、にこにこ顔にかわる。

こういうことを続けるうちに、ついに子どもが「おしっこ！」と言える日がやってくる。「とうとうやった！」と大人たちは、エピソードのなかの私のように、いそいそと、ときには、絶対の意思を持ってトイレに連れて行く。子どもによっては、これでトイレに関することは一件落着となる。この場合は大人の側にこのことに対する意識の変革をせまられるような事態は起こらない。私の場合、三人の子どもを育てているときは、このことをあまり真剣に悩まずにきた。何日間か、床やじゅうたんを汚す覚悟でおむつをはずしてきた。すると必ず子どもたちは、おむつをはずすとほとばしり出る自分のオシッコの存在に気づく。やがてそれがオシッコという言葉と結びつく（なにしろ、それまでに、その言葉は、母親の口から幾度となくでているのであるから）。こうなれば、あとは習慣化していき、やがては、自分でトイレに行かれるようになる。生活習慣の自立を一つ遂げたことになる。それも生活習慣の

自立などと意識的に考えるまでもなく無意識のうちに……。

私の記憶の中にも、また、当時ぼちぼちとつけていた育児記録にも、そのことで困ったことは記されていない。ひょっとすると、抱き上げてトイレに連れて行くときなど、嫌がったことがあったのかもしれない。けれどもその当時の子どもたちの体重は、ともかく軽かった。わたしの体力でも十分に楽々とトイレに連れて行かれたのである。だから、私は子どもたちがたとえささやかな抵抗をしめしていても、それに気がつかなかったのだろう。

発達のゆっくりなB君の場合

B君はいま九歳。小柄とはいえ、幼児特有の柔らかいぽよぽよとした感じはなく、ぎゅっとしまっている。グループに通ってきているほかの幼児よりもずっと体重もある。

B君が本格的に週二回グループに通い始めたのは三年前。当時のB君の足元はおぼつかなく、段差のあるところで、必ずといってよいほどつまづいて転んでいた。目線がいつも上加減ということもあって、なかなか足元を見ることができなかった。いまでもその傾向は残っているが、場所にも慣れたことと、足がしっかりしてきたこともあって、あまり転ばなくなった。お母さんによると、B君は生まれたときからとても弱く、よく吐いたり、血を吐いたりしたこともあったため、ともかく命を守ることに全身全霊を傾けたという。そのB君が歩けるようになったのは、グループに来る少し前のことで、五歳のときだった。お母さんはひとときたりとも目を離すことは出来なかったという。

おしっこを教えるB君

グループに通うようになったB君は、その年の夏前にグループでもおむつをはずしてパンツで過ごすことにした。家ではパンツで過ごしており、時間を

見計らってトイレに連れて行っているというお母さんの話を聞いて、グループでも同じようにパンツになったのである。十時に登園してくるので、十一時頃にトイレに連れて行くことになる。連れて行くと、たいていは出た。ときには、間に合わないこともあったがそれも普通のことであり、順調というのが私たちグループの保育者の感想だった。

やがて、九月になると、B君の大好きな男性保育者にはじめて「オヒッコ」と言って教えた。そのことをお母さんに伝えると、家でも教えることがあるという。

時は経って、次の年の五月のこと。家では、おだてると、トイレに行くという。そのあとすぐに、グループでも一緒に遊んでいる、比較的B君に親しい保育者に「オヒッコ」と教えるようになった。

ところが、六月になると、「オヒッコ」と教えてくれても、すぐには行こうとしないということが起こる。当時の記録を見ると、「トイレは教えるが、行こうとしない。保育者が引きずるように連れて行こうとすると、それが遊びになり、そうこうしているうちにトイレでする」、とある。

その後、このことに関する記録はあまりなくなる。

再び「おしっこ」の記録が増える

おしっこを「オヒッコ」という、はっきりとした言葉で私たち保育者に教えてくれるようになってから、約一年が過ぎた。その頃から、またB君のオシッコに関する記録が多くなる。

〈エピソード2〉

(1)「オヒッコ」と言うが、それまで一緒に遊んでいた女性の実習生とは行かずに、男性の保育者と行く（好きな保育者と行きたい）。

(2)「オヒッコ」と言うので、そのとき遊んでいたB君の大好きな男性保育者と一緒にトイレの方に行くが、トイレには行かない。その保育者がそれまで

B君とやっていた「おでかけごっこ」に使っていた荷物を下ろすと、「いっえあっあーい（いってらっしゃーい）」と言って、その荷物をもって出かける遊びをするように働きかける。実習生が「もう、おしっこ行かないの？」と聞くと、すーっと自分からトイレに入って行く（オシッコには行きたいが、まだ遊びを続けていたい。オシッコに行きたかったことを思い出せば、自分からトイレに入る）。

(3)「オヒッコ」と言ってから二時間も行かないであちこち遊びに行ってしまう。どうやら、このときは、オシッコに行きたいというより、遊んでくれという合図に使ったようだ（人を呼ぶために言う）。

(4)とてもオシッコに行きたそうにするのに連れて行こうとすると嫌がる。とうとう我慢ができなくなって漏れてしまった（連れて行かれること自体を嫌がる）。

そしてこのあと、エピソード1の記録へとつながっていく。記録のなかにオシッコのことが増えたのは、B君と一緒に遊んだ保育者が、「トイレに行きたそうにしているのに、何十分も行かないB君」に、なにかわからないものを感じたからであろう。

まえにも述べたように、「オシッコ」という言葉は、母親や保育者にとってとてもインパクトの強い言葉だ。私たち大人は「オシッコ」と聞いただけで、もう子どもをトイレに連れて行くことしか頭になくなる。トイレで「オシッコ」をさせるのが大人の役割と、何の疑いもなく決めてかかる。まして子ども本人が「オシッコ」と言葉で表現しているのだから、なおさら疑いの余地がない。

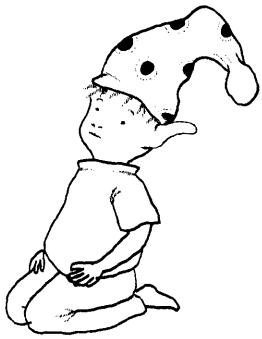
このことを子どもの立場から考えてみると、「オシッコ」と言いさえすれば、必ず大人が飛んでくるということになる。B君もそれを知っていて、例えばエピソード2の(3)のように自分が大人と一緒に遊びたいときにこの言葉を使うことがある。大人にとっては「オシッコ」は「オシッコ」以外のものを

意味しない。けれども、言葉が発達途上にあるB君にとっては、もっと含みのある言葉なのかもしれない。このことを確かめるために当時のB君の言葉の発達の様子を見てみよう。

B君の言葉

「オヒッコ」というB君の言葉、実はとても特徴があった。グループに通い始めの頃、私たち保育者には「アアア」としか聞こえない言葉も、お母さんには全部了解可能で、「あっ、いまはおはようと言ったんです」とか、「バスね」とか「カローラね」という具合だった。よーく耳を済まして聞くと、インントネーションが「おはよう」そっくりだったり「バス」そっくりだったりする。「なるほど、お母さんはこのイントネーションで全て分かるのだ」と納得した。B君と遊ぶ回数が増えるにしたがって、私たちもお母さんとまではいかなくても、大分B君の言うことが分かってきた。言葉で通じるというのはB君にとっても、私たちにとってもとても嬉しいことだった。何回も「アアア」といった挙句にやっと私たちに通じたとき、B君は笑顔で一杯の顔になる。その笑顔を見て、私たちもまた笑う。笑いあうことでその場を共有できたと思うことがよくあった。

歌も大好きで、童謡、民謡などをとても確かな音程で歌う（すべてアアアの発音であるが）。そして、保育者の前に来ては「アアー」と歌いだす。保育者によって、また場合によって、口ずさむ歌が違



う。私たちがあとに続いて歌うと、しばらくそれを聞き、歌の最後の部分をしっかり一緒に合唱して歌い終わる。

「オヒッコ」と言えるようになった時期には、言葉にとても抑揚がつき、そのうえひとつひとつの発音がアアアだけでなく、もっと本物の発音に近い音を出せるようになっていた。よく一緒に遊ぶ保育者だけでなく、新しく入った実習生にも聞き取ることが容易になってきた時期でもある。

また、単語の量は飛躍的にふえ、上手に発音できる母音を駆使しながら、いっぱいおしゃべりする。ここにそのいくつかを並べて見る（主に母音を使って発音していたのだが、ここでは、彼が言い表していた言葉そのものを表記する）。おはよう、お母さん、先生（親しい先生にはフルネームで呼びかける）、牛乳、おじさん、広尾、行きたい、食べた、おいしい、Mちゃん、おまわりさん、……。

私たち保育者にもかなりB君の言っていることが理解でき、言葉で通じることの嬉しさを経験することが多くなった時期である。

言葉が理解の壁になる

こんなに通じることが多くなってきた時期に、エピソード1のことが起こった。

問題は、ただ人を呼ぶためにだけ「オヒッコ」と言ったのでもなさそうであるということだ。本当に行きたそうに体をよじっているにもかかわらず、大人にトイレに連れて行かれることは、頑なに、まるで石のように拒否している。そして最後に私にずりずりと引っぱって連れて行かれて済ませたあとは、もう私の方を見向きもしなかった。ひっかかるのはこのことだ。

「オヒッコ」と言われて、私がどのように思って行動したかは、エピソード1のところで述べた。でもこのとき、私はB君自身が本当はなにを伝えたくて「オヒッコ」と言ったのか、実は分かっていなかっ

たのではないか。私は「オシッコ」という言葉の持つ常識的な意味に縛りつけられてしまった。その結果、逆にその言葉が壁となって、B君と私の前に立ちはだかってしまった。「オシッコ」は出たけれど、B君は私から去って行ったのであるから……。

B君の話せる言葉が多くなってきたときに、このエピソード1が起こったことには、とても深い意味があるように思う。私たちは言葉を使ってコミュニケーションを図っている。私自身もB君の言葉の多さにどこか安心して、言葉だけに目を向けてつきあってしまったように思う。母音の多かった彼の言葉が、だんだんと子音まじりの本当の音に近い音が発音できるようになることに、注意の大半がいってしまったのだ。

そこで彼が「オヒッコ」と言っても、トイレに行くということしか頭に浮かばなくなってしまった。本当は、「いま、オシッコに行きたいけれども、大人の言うとおりに素直にトイレに行くなんて、いやだ。いつまでも大人の手のひらのうちで遊んでいる僕じゃないんだ」ということだったのかもしれない。その自立の気持ちに気づいていたら、もう少し違う関係を結べたように思う。

「オシッコ」のことは、いつも躾の面からばかり取り上げて考えられがちである。子どものたどたどした言葉もしかり。なまじ言葉をしゃべれるようになったばかりに、自分の気持ちが大人に伝わらないという体験を持つ幼児がいっぱいいるのではないか。先に落し穴といったのはこのことである。幼い子どもたちがいまある、その気持ちを無視されて、トイレに連れて行かれることが度重なるとしたら、トイレの躾は完成しても、心をくみとる力は育たないのではないか。B君との関わりを通してそんなことを深く考えさせられた。

（母子愛育会　家庭指導グループ）

ある日の育児日記から (53)

佐藤　和代

有はもうすぐ三歳。この前、はじめて〝迷子〟を経験しました。

近くの公園で、何家族か集まって花見の宴会をしていた日。子どもたちはすぐに飽きて、あちこち走り回ります。有も、年上の子たちと一緒でした。ところが、急に圭だけ戻ってきて「有がいなくなった」と言うのです。「ちゃんとみてなきゃ！」なんて文句を言いつつ（子どもを放って酒盛りしていた我が身はしっかり棚上げ）探しに行きました。しかし、いない。全長二キロはある公園です。なかなか見つかりません。さすがにあせり始めた時、園内放送が。「ゆうくんという、四歳くらいの男の子が迷子になっています」あらら。事務所へ行くといましたいました、てれくさそうに笑っている有が。

やれやれ、圭は迷子なんてなったことがないから、油断してた。考えてみれば、圭はいつも私のあとを追っていたけど、有はどんどんひとりで歩いていって、私に追わせる子です。これは気をつけないと、迷子常習物になりそうよ。

さて次の日。保育園に行ったら、先生もお母さんたちも「きのう有くん、迷子呼び出しされてたね」と言って笑うのです。みんな行ってたのね、お花見…。

私の子ども時代(7)

よく遊び、よく学び

鈴木　孝

私は大正十二年（一九二三）東京生まれ。小学校三年生の時から現在まで、文京区大塚窪町（今の大塚三丁目）に住んでいます。お茶の水女子大学のすぐ近くで、通った小学校は、東京市立窪町尋常小学校、お茶大の正門のななめ向かいに今もある、文京区立窪町小学校です。このあたりには幼稚園は、護国寺の音羽幼稚園だけしかありませんでしたね。

小学校入学前（昭和四～五年頃）は、よく母の実家のある千葉に行きました。母が体が弱く、暖かく気候の良い房総の実家で、よく過ごしました。初めに、千葉の田舎の話を少ししましょう。

母の実家は外房の茂原という町で、駅から人力

車に乗って四〇分ぐらい行った、高根本郷村という所にあります。畑と田んぼの農業のかたわら、小学校の前で文房具と駄菓子屋をやっている兼業農家でした。千葉は西瓜の名産地で、畑には丸い西瓜や細長い西瓜、黄まっくわ（まくわ瓜の一種）が植えてあり、とてもおいしかったですね。トマトはダメでした。臭いが強くて、子ども向きではなかったから、塩や砂糖をつけたりして、無理に食べさせられましたよ。水田には水がはってあり、日本鯉とかドイツ鯉とか、鯉を飼っていて、雨が降らなくて田んぼの水が枯れてくると、それをつかまえて、大きな桶に移すんです。子どもにとって一番いやなのは、その鯉の肝を飲まされること。体にはとても良いのだけれど…。猪口（ちょこ）に入った黒っぽいのを飲まされる。従兄たちは無理やり飲まされていたけれど、私はイヤで絶対に飲まなかった。

当時の村の人達は、皆、裸足（はだし）でしたね。子どもも。うちのおじいさんも裸足で荷車を引いて、茂原まで学用品やお菓子を買いに行く。朝早く起きて、田舎の砂道を荷車引いてね。買ってきた物を店に並べていましたよ。学用品の他、おせんべやキャラメルなどの駄菓子も。でも田舎の子は、現金を持っていないので売れないのです。特に、キャラメルなどは売れないとカサカサになってしまう。そのカサカサがおいしくて、店番しながら食べてよくおこられました。

昔のお百姓は、穀物や野菜を上手に合理的に作っていました。田んぼの畔道に枝豆を植えたりして。私は何も知らないもので、その枝豆をかたっぱしから取って、子ども心に〝おもしろい、おもしろい〟とよその家のまでみんな取ってしまって…。おこられましたね。子どもだから、お百姓さんが目的を持って植えているなんて、全然考えなくて、〝あっ豆だ〟なんて取ったんですよ。

ちょっと雨が降ると田んぼの水があふれて、小川に鯉や鮒が流されてくるわけ。それを採るのがまた楽しい。「ぜい」という竹で編んだ筒を、川に塞を作ってそこに沈めておく。しばらくすると、大きな鮒がかかっている。その時の喜びはもううれしくて…。どの家も田んぼに鯉や鮒を飼っていました。魚が雑草を食べてくれるというのと、食糧にしたのでしょう。商売にするのではなく、自分たちの貴重な栄養源として飼ったのです。ニワトリや七面鳥も飼っていましたね。七面鳥はずい分早くから飼われていたようです。おこらせると顔をまっ赤にしてワーッとなるので、それがおもしろくておこらせたりして…。何十羽もいたわけじゃないけど、七面鳥はおもしろかったですよ。

行事では七夕が変わっていた。七夕の時は、朝早くワラで馬を作るんです。それはおじいさんが作ってくれる。その馬を車のついた板に乗せて、引っぱって鎮守様に行く。かけ声をかけて歌いながら行くんです。鎮守様のまわりを何回か回って家に戻り、今度は草を刈ってきて台車の上の馬の前に盛り、あんころ餅を作ってお供えをする。あんころ餅はお相伴できるので、これがまた楽しみ。これが上総地方の七夕です。

あの辺は日蓮宗が盛んで、「お題目」というのがある。お題目というのは〝南無妙法蓮華経…〟ととなえるあれですよ。そのお題目を集まってとなえる行事があって、それを「お題目」といっていたのでしょう。何しろ五～六歳の頃の記憶だからよくわからないのですが…。そういう時にはごちそうがでる。これは、日本中でもめずらしいと思うのですが、いわゆる「巻き寿し」です。切り口が模様になっていて、太くて、とてもきれいなみごとなお寿しですよ。三本も四本も作る。それを作る人がみな名人。私の母も、近所のおばさんも。卵や干瓢、でんぶ…いろんなものを入れて、

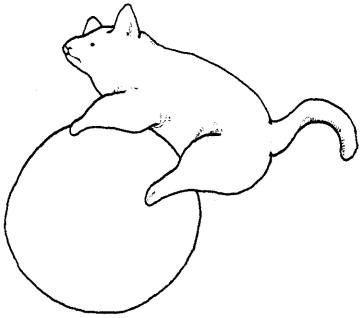
何本も小さいのり巻を作り、それをまた大きいので巻いて、だ円形に太くしていく。それを切るときれいな模様がでてくる。どこのお宅もみな名人で、とてもおいしい。お題目の時にはそれが食べられるのが、とても楽しみでした。

好きな遊びはカニ採り。田舎には、小さいカニがたくさんいるんです。バケツ一杯採って、東京に持って帰り、よく井戸の所でカニ遊びをしましたよ。東京にはカニやさんが売りにきたんです。そのぐらいカニは子どものペットというかおもちゃでした。カエルを飼うよりカニの方がおもしろかったですよ。

そんなことで田舎にも友達ができて、よく遊びました。夏には必ず行っていましたから。

東京の話にもどりましょう。

すぐ近くの東京女子高等師範学校（お茶大）は、ちょうど建てている時でした。あそこは軍の弾薬庫だった所です。私達は工事用のトロッコに乗って遊んだり、コンクリートをうつパタ板という板で小屋を作ったり、枯れ草に火をつけて遊んだりしたこともありました。もちろん工事の人におこられました。女高師は外壁がレンガ貼りの三



階建て。そこから道のこちら側は何もなく、トロッコに乗ったり、戦争ごっこをしたりの毎日でした。

他にもオニゴッコやかくれんぼなどの集団的な遊びが多く、軍艦遊びは特におもしろかったね。いわゆる〝水雷艦長〟という遊び。帽子のつばを前にかぶると艦長、横ちょにかぶると駆逐艦、後ろにかぶると水雷。艦長は駆逐艦に勝ち、駆逐艦は水雷をやっつける。そして水雷は艦長をつかまえることができる。電信柱を陣地にしてよくやりました。

昭和の初めは野球がはやりました。六大学の野球が人気で、ラジオ店の前には人がたくさん集まりました。ちょうど、戦後、力道山のプロレスを見に街頭テレビに集まったように。それで、子ども達は野球に熱中しましたよ。昭和の五～六年頃は不景気で、失業時代でしたから、大学生も就職できずにぶらぶらしていた時代でした。そのお兄さん達が野球の監督になってくれて…。ユニフォームを作って、ラシャでチーム名の型をとってつけたんですよ。私達は〝すみれ〟というチーム名で、それを着て、大塚公園でよく試合をしました。

祭りも楽しかった。この辺は吹上神社や天祖神社の氏子です。祭りの仕度は運動足袋をはき、武者絵の描いてある万燈（まんとう）という長い棒のついた燈籠、鈴のたすきに花笠をかぶり、錫杖（しゃくじょう）という鉄の輪のついた杖を持った。私の町会には神輿（みこし）がなくて山車（だし）だけだったので、子ども心にとても肩身の狭い思いがしましたね。まわりは拓殖大学や東京高等師範の学生の下宿屋さんが多く、子どもが少ない地域でしたから。祭りに参加すると町会からそば券と入浴券がもらえて、それを持って子ども同士みんなで、おそば屋に行って食べるのも楽しかったね。子どもはいつも集団で行動していました。

少年団ごっこも楽しかった。当時、講談社からでていた『村の少年団』という佐々木邦の作品があって、それがおもしろくて、自分達で旗を作り、少年団ごっこをしました。四kmぐらい遠くはなれた〝板橋のガスタンク〟まで行って、そこの土手で少年団ごっこをした記憶があります。おむすびを作ってもらってね。子どもは火を燃やすのが好きで、あんな広い所で火なんかいくら燃やしても平気なもんで、おこられるけど、おもしろいからよくやりました。今じゃ考えられないけれどね。他にも『少年倶楽部』や『少女倶楽部』など、子ども向けの本がたくさんあり、佐藤紅緑とか高垣眸とか、子どもの血をワクワクさせるような本がたくさんありました。講談社は野間清治という人が初代の社長でしたね。本からはいろいろ刺激をうけました。

ベーゴマも熱中しました。ベーゴマは、買ってきたのをただ使うのではなく、まず土の中に埋めて腐らせる。そして金剛砂で角を作ったり、下をとがらせたりする。金剛砂は自転車屋さんのグラインダーを借りる。「おじさん、やって」って頼むんです。遊ぶ時はバケツと床がいる。私はゴザでできた夏座ぶとんを床にして、水をかけてやった。友達が「鈴木君の所の床は一番イイ」と言ってくれましたよ。普通のゴザでは床が深くて回転が単純だからだめなんですよ。その夏座ぶとんを二つもつぶして、母におこられました。私の夏座ぶとんの床は浅いので、ベーゴマの強さがすぐにあらわれる。勝負が早くついて、よかったね。でもおこられた。

ピストルや空気銃もよくやりました。『少年倶楽部』の通信販売で買えるんです。空気銃は三円ぐらい。威力はないけれど、男の子はよく持っていましたね。私も買ってもらった。私の銃はとてもよくて、十円もした。デパートでいいのを買ってもらったんです。イタズラばかりしていました

よ。ピストルもパンパン音がするのでおもしろくて好きでしたよ。それは今の子も同じでしょ？

この当時は公民館というのがあって、そこの活動に参加する子もたくさんいました。大塚公園に公民館があり、剣道、柔道などで体を鍛えました。町道場もたくさんあり、一番さかんなのは剣道。大寒に入ると寒稽古があり、四年生以上は学校が始まる時間まで、毎朝稽古をする。学校の体育館まで、鼻緒の太い高歯（たかば）の下駄をはいて、カランコロンとわざと音を響かせて歩くんです。剣道着に羽織をはおり、竹刀（しない）を持って、カランコロンと…。小学生も。高歯をはくと自分の背が高くなったような気がしてとても気持ちがいい。カッコよかったですよ。体育館には隅に大きな火鉢が一つあるだけ。そこで切り返しと練習試合をする。大寒に入ると毎朝、一週間ぐらい続ける。朝まだまっ暗な時に起きて、誰も通っていない道を通いました。

勉強の方もしっかりやりましたよ。小学校の時の知識は大きい。それだけ窪町小学校はよかったですね。校長は高等官、昔の中央官庁の課長級です。だから祝日の儀式には金モールの服を着てました。図工室には金工、木工の設備があり、ハンダごて、やすり、カンナ、作業台や万力、足踏みの糸のこも二〇台ぐらいありましたね。図画室、音楽室、作法室も立派でした。小学校なのに…。理科では博物室と実験室があり、標本や剝製、人骨の模型、薬品棚、フラスコ、アルコールランプもあった。地歴室では地形の起伏模型や歴史上の人物の肖像画がずらりとあり、今でもあの顔は誰だと思い出しますね。気象室や温室もありました。私は転校してきたもので、最初はびっくりしましたよ。通信簿も今のようにいろんな項目に細分化されていて、その上で甲乙丙をつける。窪町小は当時のモデルスクールで、欧米を見習って

作った、東京でも一、二番の設備の学校でしたよ。スチーム暖房もあり、いろいろお金をかけてやってくれた所でした。

学校の先生方は教え方が上手でいい先生ばかり、子ども達はみんな好きでしたね。小学校の先生なので全教科教えられるんだけれど、図工や歴史、化学などは専科の先生でした。みんな好きでした。

あの頃でもすでに補習教育というのはありました。〝視学〟という監督役人がいて、その人が午後になると来る。そういう時は先生が慌ててみんなを帰宅させる。補習は受験勉強なのでしてはいけないことでしたので、先生も大変だったらしいです。今みたいに入試の競争もあって、日曜日には青山会館などで模擬テストを受けました。何番まではどこの中学に入れる、というのがあったから。受験勉強は五年生から始めた。午後三時から五時半ぐらいまでと、朝の二回。神田の三省堂まで参考書を買いに行った。全科や理科や国語など五冊ぐらい買ってよく勉強しましたよ。特に算数の初級・中級・上級と三段式の参考書は大好きでした。とても力だめしになるのです。中学校で教わる以上のことを窪町小学校で学びました。よく遊び、よく勉強し、どちらも楽しかった。そういう子ども時代でした。（談）

（東京都文京区在住）

編集後記

今月から「動物行動の研究から」が始まります。人間とは異なった意味の世界をもつ動物たちの行動を、私たち人間はどう読み取り、その世界をどう理解するのか。六回シリーズで連載です。どうぞお楽しみに。

＊

「私の子ども時代」、今回は鈴木さんの昭和初期の都市に育った男の子のお話です。まだ17区しかなかった頃の東京には、牧場があったり、広場もたくさんあり、時間的にも空間的にも、子ども達が自由に動き回る余裕があったようです。「学校は狭いのでたいした遊びはできない」というお話がでて、今ではその狭い学校が、子どもが自由に遊べる唯一の広い空間となってしまったと、苦笑いになりました。息子の通う小学校では、この冬から、ころんでケガをする子が多いという理由で「オニごっこ禁止」です。今の子ども達の現実は身動きとれません。

「水雷艦長」は、今では、少しちがいますが「泥警（ドロケイ）」という遊びに変化していてとてもおもしろい遊びです。もともとは、明治の頃に軍事思想の普及と啓蒙のために教育的に作られた遊びで、学校の教材として教えられたということです。しかし、「そんな遊びはしなかった」という方もたくさんいらして、自然の山野に恵まれた環境で育った子ども達にとっては、そんなルールのあるゲーム遊びは必要もなかったことが想像されます。

（K）

幼児の教育

第九十四巻　第五号

（一九九五年五月号）

定価四五〇円（本体四三七円）

発行　平成七年五月一日

編集兼発行人　田代　和美

発行所　日本幼稚園協会

〒112東京都文京区大塚二―一―一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所　図書印刷株式会社

〒108東京都港区三田五―一二―一

発売所　株式会社　フレーベル館

〒113東京都文京区本駒込

六―一四―九

☎〇三―五三九五―六六〇四

振替　〇〇一九〇―二―一九六四〇

☆　本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

手づくり保育シリーズ⑦

花の紙工作 フラワークラフト

好評「思い出プレゼント」の著者のペーパーフラワー特集。これで保育室は、一年中、花でいっぱい。明るく楽しい雰囲気の中で、保育を展開しましょう。

★身近な花を紙で作って、飾ったり、プレゼントしたり。
★サクラ、チューリップ、タンポポ、バラなど31種類。
★壁面やアーチの飾り方、贈り物にアレンジしたりの用途についての提案も盛り込まれています。

島田明美・著

B5判・96頁・定価 2,200円（本体 2,136円）

手づくり保育シリーズ①
歌ってだいすき－湯浅とんぼの遊びうた傑作選－
湯浅とんぼ・著　B5判・104頁・定価 2,200円（本体 2,136円）

手づくり保育シリーズ②
布で作った アイデアおもちゃ
鈴木美也子・著　B5判・96頁・定価 2,200円（本体 2,136円）

手づくり保育シリーズ③
思い出プレゼント
島田明美・著　B5判・96頁・定価 2,200円（本体 2,136円）

手づくり保育シリーズ④
保育に生かす 55の生活アイデア
ほいく♥けんきゅうかい・著　B5判・96頁・定価 2,200円（本体 2,136円）

手づくり保育シリーズ⑤
劇あそびがとびだした
花輪　充・著　B5判・104頁・定価 2,200円（本体 2,136円）

手づくり保育シリーズ⑥
環境構成 赤ちゃんグッズ
八王子保育研究会・著　B5判・96頁・定価 2,200円（本体 2,136円）

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

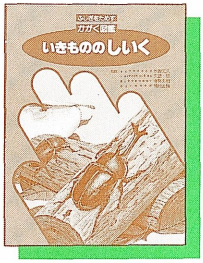
ふしぎをためす かがく図鑑

調べる図鑑より一歩進んだ「やってみる図鑑」です。
実際に体験して得た知識こそ、ほんとうの知識です。
「かがく図鑑」は、実体験のお手伝いをします。

監修／東京大学名誉教授　水野丈夫

特長

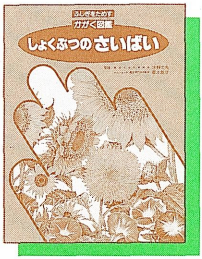
①『しっかりした、役に立つ、基本図鑑』で、何年も使える財産になります。
②美しいスーパーリアルイラスト、撮りおろし写真を使用しています。
③好評《しぜん図鑑》と同じ仕様で、書棚にきちんと並べられます。
④子どもだけでなく、保育者にも役立ちます。
⑤各見開きごとに完結した記事で、使いやすく構成しました。



①いきものの しいく

監修／元東京都多摩動物公園　園長　矢島　稔　富士自然動物園協会　今泉忠明　国立科学博物館　武田正倫

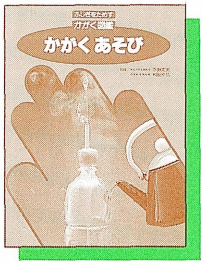
昆虫（約30種）、動物（約10種）、鳥（約10種）、水の生き物（約20種）を取りあげました。飼育方法、飼育しながらできる観察のポイントなどを詳しく掲載。園でのウサギやモルモットの飼育、クラスでのザリガニやオタマジャクシ、カブトムシの飼育にも役立ちます。



②しょくぶつの さいばい

監修／テクノ・ホルティ園芸専門学校　肥土邦彦

花（約80種）、野菜（約40種）を取りあげました。美しい花のイラストや写真、詳しい栽培方法を掲載。見て楽しむだけではない、観察のポイントも。園児と一緒に園庭に花壇を作ったり、鉢植えを楽しんだり、簡単な野菜の栽培をしたりと、いろいろ利用できます。



③かがくあそび

監修／国立科学博物館　村松伸弘

鏡や虫眼鏡、磁石を使った簡単な科学遊び。水や氷の性質が、楽しみながらわかる遊びを取りあげます。シャボン玉遊び、花びらを使った色水遊び、砂場での遊びなど園の活動の中でも使えます。

A４判・各116頁・定価各2,000円（本体1,942円）セット定価6,000円（本体5,826円）

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。